

福祉文化通信

～ Well-being への道～

2018.3.31
Vol. 85

●発行／広報委員会
福田 泰紀・関矢 秀幸
●制作／長瀬 さやか

日本福祉文化学会事務局 〒305-0033 茨城県つくば市東新井 24-5 特定非営利活動法人 茨城 YMCA 内 Tel/Fax:029-896-9389 E-mail:fukushibunka@lagoon.ocn.ne.jp



去る2月18日(日)、立教大学池袋キャンパスにおいて、第28回日本福祉文化学会全国大会(東京大会)が、「いのちとくらし」を拓



上野千鶴子さん

く福祉文化の創造」をテーマに開催された。ここでは今回の大会の特徴と成果について、報告する。
まず内容面では、この間、研究会を中心に進めてきた福祉文化研究の方法「文化の視点から福祉を見る」ことにこだわった。特に上野千鶴子さんを迎えた特別講演では、死に関わる、多くの人がとらわれている慣習、制度、価値観など死に関わる福祉文化、を改めて問い直す機会となった。
また会員企画による2つの自主シンポジウムも画期的な内容となった。テーマももちろんだが、報告者が、当事者だったり、福祉とは縁のない(？)スポーツ業界や遊びの専門家だったりした点である。まさに当学会の特徴が色濃く出たシンポジウムとなった。終了後、まったく異なる分野の報告者同士が交流をすることができたのも、大会の成果と言えるだろう。

「時代に対応する学会の新しい方向性を打ち出す」ことを目的として、今年度からスタートした「福祉文化研究・調査プロジェクト」の中間報告も、「戦争と福祉」、「介護従事者の文化活動」、「日韓福祉レク比較」など、多彩な内容となった。
運営面では、1日開催という枠組みの中で、関わった会員の方々の創意工夫と見事な役割分担で、「省力化」と「内容の充実化」を両立させるといふ「荒技」を、見事に成し遂げることができた。
さらに特筆すべきは、「おひとりさま部会」の立ち上げである。これは特別講演を受けて、さらに議論を深めようと、会員の自主的な動きとして、東京、大阪の2カ所、今後も継続したセミナーを開催するものである。
東京大会が、私の会長としての3年間の総決算とも言えるべき大会になり、今はホッとしている。まずは大会運営に携わってくださった方々にお礼を述べたい。そして今回の成果を次に引き継ぎ、来年の大阪大会でまた多くの皆さんと語り合えることを強く願っている。次は大阪で会いましょう。

特集

第28回日本福祉文化学会 全国大会 東京大会報告

「いのちとくらし」のあり方を文化の視点から考える
大会の成果を受けて、自主ゼミナールがスタートします！



日本福祉文化学会会長
馬場 清

2018年2月18日(日)
立教大学・池袋キャンパス

2017年度総会報告

日本福祉文化学会事務局長 前嶋 元

平成30年2月18日(日)全国大会の午前中に総会が開催された。

第6期役員体制の振り返りも含めた会長の挨拶から始まり、熱心な議論がなされた。

協議事項として①2016年度事業報告、②2017年度収支決算書及び監査報告、③第7期役員体制(案)について、④2018年度事業方針及び事業計画(案)、⑤2018年度予算書(案)、⑥福祉文化学会理事会事務局長手当の提案について、⑦名誉会員の推薦の件について」の7つの議案について審議し、すべてが可決された。初代名誉会員として「蘭田碩哉氏(現顧問)」が推薦され、承認された。

また、第7期役員体制は別表のとおり

承認された。この4月から石田新会長のもと、関西に事務局を移転してスタート

することになる。多くの会員の方にご出席いただき、ありがとうございました。

役職	担当	氏名	役職	担当	氏名
会長		石田 易司	理事	北海道ブロック	徳田 真彦(理事会推薦)
副会長		マーレー 寛子	理事	東北ブロック	小池 和幸
副会長	実践学会賞選考委員会	永山 誠	理事	関東ブロック	小沼 肇
理事	総務委員会	前嶋 元	理事	中部・東海ブロック	平田 厚
理事	企画委員会	川北 典子	理事	北陸ブロック	関矢 秀幸(理事会推薦)
理事	企画委員会	島田 治子	理事	北陸ブロック	未定(理事会推薦)
理事	研究委員会	結城 俊哉	理事	関西ブロック	小坂 享子
理事	研究委員会	阿比留 久美	理事	中・四国ブロック	松原 徹
理事	広報委員会	中島 智	理事	九州ブロック	雨宮 洋子
理事	研究誌編集委員会 中・四国ブロック	中嶋 洋	理事	沖縄ブロック	安里 和子
理事	研究誌編集委員会	月田 みづえ	評議員	研究誌編集委員会	本多 洋史
理事	国際交流委員会	脇坂 博史	事務局次長		岡村 ヒロ子
理事	国際交流委員会	沈 潔			福山 正和, 佐野 光彦, 中西 久雄, 藤原 一秀

BUNKA NO KOUSATEN -3-

文化の交差点③

* 学会員から福祉文化のルーツを考える視点でお届けします。

念ずれば:

たまごの家はいつでも開いていた

「高齢者よ、大志を抱け」と新年頭には参加者みんなが夢や希望を語りあうことにした。荒唐無稽や妄想、何でもあり：はじめは、ピンピンコロリや終活等々の話でにぎわったが、次の週には先哲の名言や好きな言葉を書き添えてきた方があった。それに触発されて次々に集まった文言の一部を紹介してみよう。

- 老年は発見の時
- 障害者と老人は社会の開拓者
- はまなすや沖には今も未来あり(草田男)
- 最期の一念我にあり死のためならず生のためなり(空穂)
- 遊びをせんとやうまれけむ(梁塵秘抄)
- 恩送り
- 年々にわが悲しみは深くしていよよ華やぐいのちなりけり(かの子) 等々。

なんと力強くみずみずしい心情あふれる言の葉であるうか。介護予防・要支援1、2が対象のたまごの家デイサービスは、支援するものさされるものの境界を念じつつけている。

筆者の夢は「棚からぼたもち」でこんなたまごの家常設の場を得て、次世代と共によき時間を過ごすこと。高齢者だからできること、やるべきことを鼓舞しあつて「念ずれば花開く」と夢を念じつつけている。

「小さなたまごが大きくなってみんな楽しく食事して 足腰鍛えて健康に愛され 惜しまれ 悲しまれ 羽ばたく姿は美しく 明日の日の出を迎えよう。」後半の哀愁漂うフレーズは永遠のいのちの謳歌であるうか。ゴーギャンの絵を連想させる。



『ひこばえ広場たまごの家』
加藤 美枝

会員情報

- 2018年2月22日までに新規ご入会された方のお名前と所属ブロックをお知らせいたします(敬称略)
宮城 直子(沖縄ブロック)、山口 弘幸(九州ブロック)、片山 千佳(関西ブロック)、小川 雅司(関西ブロック)、徳田 真彦(北海道ブロック)、竹田 美文(関西ブロック)
- 2018年2月22日現在
(会員数) 個人会員 290名 団体会員 7団体

お願い 2018年度会費および過年度分の会費の納入をお願いいたします。

東京大会の概要を ダイジェストでお届けします！

I 自主シンポジウム1

報告：中島智

スポーツ × 福祉がひらく未来

（一社）東京スポーツクラブ代表理事の久保田淳氏からは「Jリーグのクラブでの活動事例」として病室とスタジアムを繋ぐ分身ロボット等について、NPO法人ソーシャルフットボール協会の理事長の徳堂泰作氏からは「精神障がいとフットボール」について、NPO法人バルシューレジャパン理事の福士唯男氏からは世代を超えたスポーツ促進プロジェクトとして「バルシューレの可能性」についてお話いただいた。また（二社）鬼ごっこ協会の平塚佑志氏から提供頂いた資料を基に「スポーツ鬼ごっこを通じて児童や放課後教室への取組」について中島が紹介した。いずれも遊びの要素が根底にある点で共通し、スポーツと福祉分野の協働の可能性が示された。



II 自主シンポジウム2

報告：善本真弓

病気や障がいのある子どもの生活と遊び

「医療的ケア児」とそのご家族の生活と遊びに焦点をあてたシンポジウムを開催した。すぎなみ重度心身障害児親子の会みかん組の副代表・荻野志保さんと委員・平井未香さんより、お子さんの障がい、1日の生活家族の思い、保育施設受け入れの困難、子ども同士の関わり、経験を広げるイベントの開催など貴重な話題提供があり、続いて、東京おもちゃ美術館副館長の石井今日子さんから難病の子どもと家族が楽しめる貸し切り招待イベントの実践報告があった。それらを受け、助言者・榎原洋一先生より、遊びの大切さ、子どもの意志、親子のQOLの重要性、インクルーシブのあり方について言及された論点整理と示唆をいただいた。参加者からの感想・意見もいただき、今後につなげる必要性を痛感したシンポジウムとなった。



III 福祉文化研究・ 調査プロジェクト報告

報告：佐藤嗣道

福祉文化研究の活性化をめざし、研究課題を公募し助成金を支給する新プロジェクトが昨年、開始された。理論研究／実践研究／調査の3ジャンルで研究課題を公募し審査した結果、4つの研究課題が採択された。この度、東京大会においてその研究成果の一部が報告された。理論研究（2題）は、戦争と福祉文化に関する課題であり、篠原拓也らによる「戦時に福祉文化を実現させた思想―坂東俘虜収容所における文化的活動を題材として」、および結城俊哉らによる「戦争文化に抗する福祉文化思想の基盤研究」が発表された。

実践研究は、滝口真による「高齢者施設における福祉レクリエーションの日報比較調査研究」で、韓国の状況が報告された。調査では、福

山正和らによる「福祉・介護従事者の文化的活動への参加についての調査研究」の具体的計画が報告された。いずれも今後の発展が楽しみな内容であった。



IV 上野千鶴子さん特別講演

報告：阿比留久美

『おひとりさま』の老後と最期——「死にゆく者の自律」

特別講演では、家族福祉に依存せずに生き、そして最期を迎えていく「おひとりさま」の老後と最期について実践的に研究し、解き明かしてこられている上野千鶴子さんに「死にゆく者の自律」と題してご講演いただいた。

上野さんによれば、この10年の間に自分の家でひとり暮らしをしながら最期を迎える「在宅ひとり死」の条件は「家族がいること」から、家族を中心とした関係者が少なく「外野のノイズが少なくこと」に変化した。介護保険制度成立による地域包括ケアシステムの整備によって、支える側も支えられる側も特別な資源がなくてもできるかぎり在宅で過ごすことが可能になった。病院や施設への入院・入所は、当事者のニーズによりも家族のニーズによって決められてしまっている現状があるからこそ、当事者の最大限の自律を尊重することが必要だということが上野さんから提唱された。



V 懇親会の様子

報告：青木智枝

マキムホールでの研究調査報告、上野千鶴子さんの講演会で更なる課題を頂き「鈴懸の径」を皆さんと歩きSports会館で懇親会の時を持った。ホスピタリティ溢れる日比谷松本楼スタッフと学生さんが迎えて下さり美味い料理とワインで心ほぐれ岡村ヒロ子さん主催「私空間」で学んだ「関係力をみがくトレーニング」岡田氏「ケアのフオークロ」結城氏との再会。多方面に渡る方々との交流で研究発表や講演会の内容をソフトに語って頂き多様な視点を伺えた事は福祉を文化的に見るヒントとなった。

上野千鶴子さんの気さくなお人柄に触れ、勇気も頂いた。沖繩ブロック差し入れ泡盛を新会長石田氏が、皆さんのグラスに注がれたお姿も印象的であった。



VI 日本福祉文化学会2017年度 福祉文化実践学会賞

報告：永山誠

NPO法人「小さな種・こころ」に決定

福井県鯖江市NPO法人「小さな種・こころ」に決定。2005年から本人家族、行政、市民等の協力をえて、鯖江市「協働パイロット事業」として発足。2012年からNPO化。

うつ病、自閉症、統合失調症等の方が減農薬野菜を栽培、これを「ランチレストラン」「カフェテリア」でメニューとして提供している。「しごと確保」を原点にした福祉実践である。

表彰式では理事長の清水孝次氏に馬場会長から表彰状と賞金が授与授与された。



VII 委員会報告

報告：阿比留久美

「私の最期」を一緒に考えるゼミ部会の設立

研究委員会では、今回の上野千鶴子さんの特別講演を受け、自分の「最期」をどのように迎えたいか、そのためにどのような準備をするのかを共同で研究していくために、「私の最期」を一緒に考えるゼミを自主ゼミとして立ち上げた。

現時点で関東では3月18日10時30分～12時30分に立教大学池袋キャンパス16号館で、関西では3月25日15時～17時30分に岡村副会長のひらく「私空間」で開催された。学会内外を問わず参加者を募り、生活圏のなかで「私の最期」を考えられるよう他地域の会員の方にもぜひ自主ゼミを立ち上げていただくとよいと考えており、必要に応じて研究委員会にご相談いただきたい。